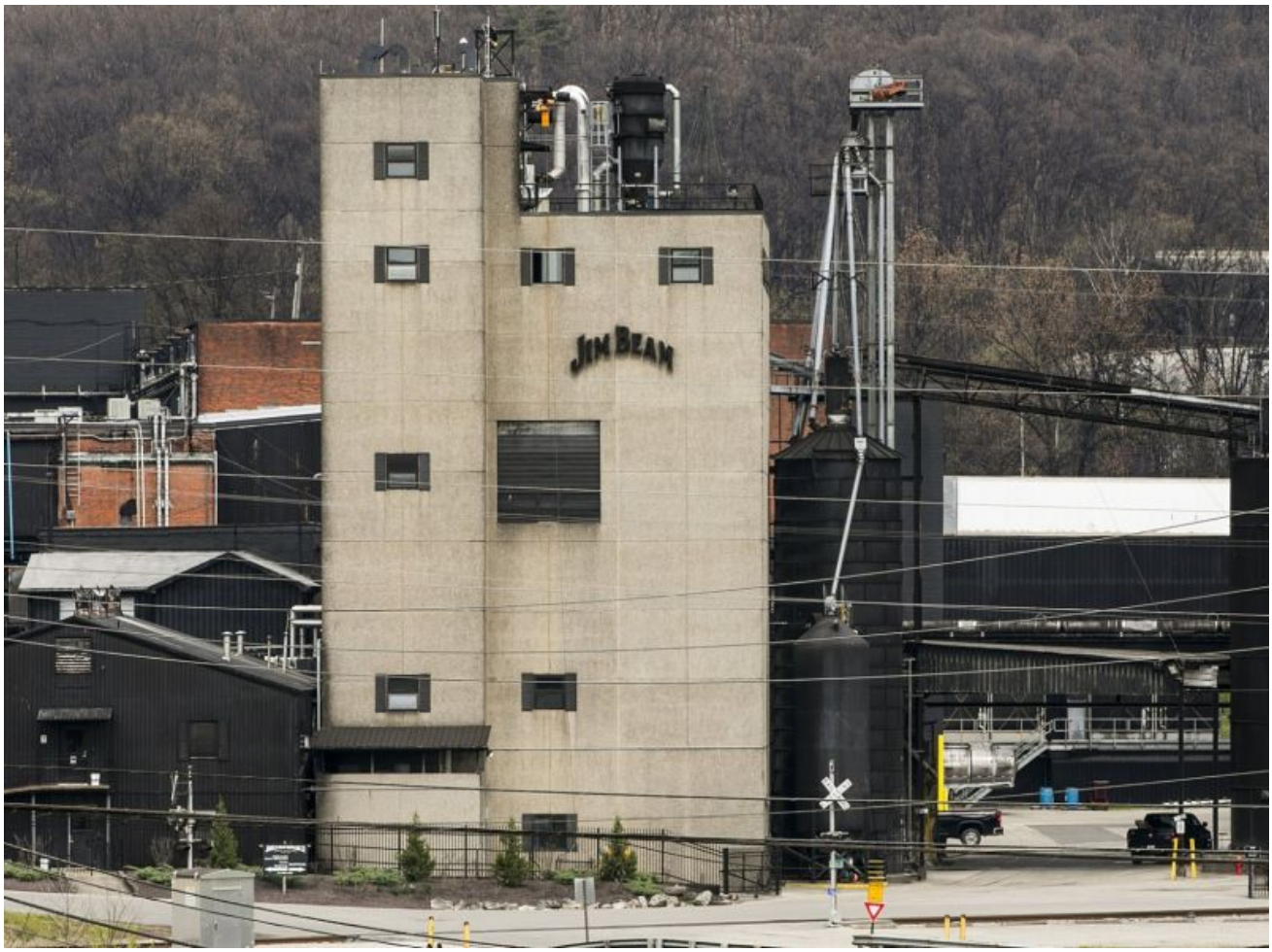
vinetur

ジムビーム、クレルモン蒸留所の操業停止を2027年末まで延長

ケンタッキー州の主力バーボン施設で近代化工事を進める間、ジムビームは別の施設に生産を集約する

2026年11月17日（火）



Louisville Business Firstが11月16日（月）に報じたところによると、ジムビームはケンタッキー州クレルモンにある主力施設での蒸留停止を2027年末まで延長した。従来は2026年までの停止が予定されており、さらに1年延びることになる。

同紙によると、同社はクレルモンの施設群を近代化する間、別の施設に生産を集約している。延長により、同施設の主な蒸留業務は2026年と2027年の両年を通じて停止したままとなる。従来の計画では、2027年中に再開する見通しだった。

今回の措置はケンタッキー州の主要なバーボン製造施設に影響するが、ジムビームがバーボンの製造を全面的に停止するわけではない。公表された情報では、長期停止の理由は建設・近代化工事と、同社の生産網内での生産能力の移転に関連づけられており、ブランド全体の生産停止とはされていない。

報道には生産減少量の推計は示されておらず、2027年末以降の具体的な再開日も明らかにされていない。また、この延長だけを根拠に、ジムビームの販売、在庫、市場シェアがどう変化するかを算出することもできない。

ジムビームが世界最大級のバーボンブランドの一つであることから、今回の決定は重要な意味を持つ。VinePairは、The Spirits Businessの「Brand Champions」レポートのデータを引用し、ジムビームは2025年、米国産ウイスキーブランドとして世界首位となり、9リットル換算で1,670万ケースを販売したと報じた。この規模を踏まえると、ブランドの製造拠点の変更はバーボン業界にとって注目に値する。特にケンタッキー州では、生産能力や熟成中の在庫が蒸留業者、販売業者、小売業者から注視されている。

クレルモンは長年、米国のバーボン市場におけるジムビームのブランドイメージと結びついてきた。主力蒸留所の停止を延長することは、同社が著名な施設の一つを更新する間、より長期にわたって生産システムの他の部分に頼る意向であることを示している。ただし、公表情報では、ジムビームの生産量のうちどの程度が他に振り分けられるのか、どの施設がその分を担うのか、またクレルモンで蒸留を再開した後に近代化によって長期的な生産能力が変わるのかは明らかにされていない。

ジムビームは、日本のサントリーホールディングス傘下で、ニューヨークに拠点を置く酒類事業子会社のSuntory Global Spiritsに属している。Suntory Global Spiritsは2025年の会社資料で、約30カ国に約6,000人の従業員を擁すると説明している。サントリーホールディングスの2025年の連結売上高は、酒税を含めて3兆4,325億円だった。この数字はグループ全体のものであり、蒸留酒事業だけを示すものではない。

こうした企業規模は、大規模な改修を行う間に生産を社内で移転する柔軟性につながる。一方、これまでに公表された情報では、重要な点が明らかになっていない。Louisville Business Firstはクレルモンの操業停止延長を報じたものの、工事費、近代化後の施設の生産能力、工事中に他の施設へ振り向けるバーボンの量について、公表された数値はない。

ケンタッキー州のバーボン業界にとって、今回の動きはブランドの後退というより、知名度の高い生産拠点の一つで産業面の調整が長期化することを示している。ジムビームは広く流通する大規模ブランドであり、現時点で入手可能な情報によれば、主力施設の改修中はクレルモン以外に生産を集約して市場への供給を続ける方針だ。

今回の変更は、大手バーボンメーカーがブランド全体の操業停止を示唆することなく、工場の大規模改修を長期化できることも浮き彫りにしている。ただし、同社は延長に際して詳細な操業計画を公表していないため、クレルモンでの停止期間が延びることで、今後の生産計画や倉庫間の在庫移動、近代化工事完了後の再開時期にどのような影響が出るかは不明だ。生産減少量の推計、財務への影響、より具体的な再開日は公表されていない。